



Title	言語継承における継承語不安と継承語イデオロギー：日本社会で継承語を継承しなかったニューカマー2世の語りから
Author(s)	中家, 晶瑛
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2024, 20, p. 99-111
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102048
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《研究ノート》

言語継承における継承語不安と継承語イデオロギー

— 日本社会で継承語を継承しなかったニューカマー2世の語りから —

中家 晶瑛（上智大学大学院 博士後期課程）

shoei_nakaie@yahoo.co.jp

**Heritage Language Anxiety and Heritage Language Ideology in Language
Inheritance:**

Insights from Narratives of Second-Generation Newcomers Who Did Not Inherit the Heritage
Language in Japanese Society

Shoei Nakaie

キーワード：家庭言語継承、継承語不安、本質主義、ニューカマー2世、テーマ分析

1. はじめに

国境を越えた人々の往来や定住の一般化から、日本在住の外国につながりを持つ子の存在は、今や珍しい存在ではない。そのような子らは、現地語のほかに母語や継承語など、複数言語間に身を置いて生活していることは容易に想像がつく。1990年代以降、学齢期に来日したニューカマーの児童・生徒の急増から、彼らに向けた日本語指導などの教育課題の議論が重ねられてきた（志水・清水, 2001 など）。特に彼らに対する母語・継承語教育は、2000年代初頭から、北米のバイリンガル教育の知見をもとに実践研究が蓄積され、さらに日本語教育と並行させた母語教育も実践されてきた（真嶋, 2019）。

母語や継承語の定義は、研究者によって微妙に異なる。例えば、高橋（2008）は、日本生まれや就学前に来日し現地語が優勢になったニューカマーにとっては親の母語は自らの母語ではないことから、親の母語を継承語という枠組みで捉える必要があると述べた。また中島（2017）は、Skutnabb-Kangas（1981）の「一番初めに覚えた言語」「最もよく理解できる言語」「アイデンティティが持てる言語」等の定義を有する母語と微妙な違いがあるとし、継承語を「親の母語、子どもにとっては親から継承する言語」と定義した。

継承語教育の意義は、子の学習面、子のアイデンティティの形成などの情緒面、親子の良好なコミュニケーションに資する点であるとされる（中島, 2003）。こうした意義のもと、今まで蓄積されてきた継承語教育研究やそれに伴う実践は、親や教育者によって遂行・実施された。そしてそれは、日本社会における言語的にマイノリティな親子を力づけ、モノリンガルの規範の強い日本社会のなかで、彼らの言語文化保持に多大な貢献をしてきた。その成果は、どれほど強調してもしすぎることはない。しかしその一方で、親や教育者などの継承語教育推進者の熱意について、少し注意を向ける必要のあ

る点もあろう。

中島(2003)は、継承語は「親が子どもにどうしても習わせたいことば」だとし、親が子に継承語を継承させることへ抱く並々な熱意があるとしている。しかし、このような熱意が親にあったとしても、必ずしも全ての親が、子に継承語を継承する、また、継承させる選択をするとは限らない。社会・経済的な理由や日本社会の言語文化的多様性の欠如により、子にとっては継承語である、自らの母語を継承させたいと思っけていてもそれができなかった親もいる(坂本・宮崎, 2016; Nakamura, 2016)。他にも、継承語教育の地域間格差による継承語学習機会の欠如も挙げられる(高橋, 2019)。さらに、コミュニティによっては、多くの人々の継承語となりうる民族語は、コミュニティの共通語や教育言語より軽視される場合もある(山下, 2018)。このように、必ずしも全ての親が、継承語を継承させられるわけではなく、翻って、外国につながりを持つ子の全てが、継承語習得機会を有するわけではないのである。

そして、たとえ親の熱意や強い意志から子に継承語習得環境や継承語学習機会が提供されたとしても、必ずしも全ての子が継承語を継承するとは限らない。「親が〇〇人なら、△△語が話せるだろう」といった周囲の期待やプレッシャーなどの理由から継承語を継承しなかった子の存在も推測される。安東(2022)は、聞こえない親を持つ聞こえる子であるコーダ(CODA: Children of Deaf Adults)の言語継承について、周囲の「コーダだから手話ができるだろう」といった期待が彼らを手話学習から遠ざけていることを指摘した¹⁾。

上述のような、継承語能力の期待に対し子が抱く不安は、日本の文脈を有する継承語教育研究においても言及されてきたが、きわめて少ない(尾関・深澤・牛窪, 2011)。多くの研究では、継承語学習によって親への理解が深まり感謝の念を抱くようになったなどといった、子が感じた継承語教育の意義や有用性といったポジティブな側面に焦点が当たってきた(本間・重松, 2021; 坪田, 2018 など)。しかし、ポジティブな側面を考察するのみでは、ニューカマー親子の言語継承の様相を多面的に検討することはできないと考える。よって本稿ではあえて、継承語に対して子が抱く不安、といったネガティブな側面に着目し、ニューカマー2世が言語継承をしなかった様相を彼らの視点から探索的に明らかにすることを目的とする。

なお、本研究におけるニューカマー2世は、「成人後に来日した両親のもと、日本で生まれ育ち、日本語を母語とする者」とする。そして、「継承語を継承しなかった」という定義については、言語継承の有無を親の言語(手話)の使用の観点から見た安東(2022)を参考にし、「親子間のコミュニケーションで日常的に継承語を使用しなかったため、継承語を継承しなかった」場合とする。

2. 先行研究

2.1 親子間コミュニケーションの使用言語

外国につながりを持つ子は、周囲から継承語能力に大きな期待を向けられる。継承語としての日本語の言語観を探究した尾関・深澤・牛窪(2011)は、「ハーフだから日本語はできて当然」と同級生や教育者による日本語能力を当然視する態度への、日タイ国際結婚家庭の子の苦悩を明らかにした。彼女は、学齢期以降は日常生活や親子間のコミュニケーションでは主にタイ語を使用していた。また、中家(2022)は、中国出身の両親の母語でない日本語で親子間のコミュニケーションをとる、ニュー

カマー父子の言語観を明らかにした。ニューカマー1世の父親は、親子間のコミュニケーションを中国語で行おうと思ったことはあったが日本社会の言語文化的環境によってそうならなかったと明かした。このように、それぞれの家庭や社会状況から言語環境は多様であり、外国につながりを持つ子とその親の親子間コミュニケーションの使用言語を固定的に捉えることはできないことがわかる。

2.2 親の継承語教育への意識

中島（2003）は、継承語教育の意義を挙げながら、親が抱く継承語教育への当然視について述べた。中島（2003）によると、親にとって継承語は「親が子どもにどうしても習わせたいことば」であり、また、継承語は「親のことばであるから、子どもができるのは当たり前」という性質があるとし、親が抱く継承語教育への当然視とその思いを強調している。この継承語の性質は、中家（2022, p.137）においても、「親の母国語ですから忘れてはいけない」という子に継承語を継承させようという強い決意が、ニューカマー1世の父親の語りにも見られた。

また、家庭言語政策（Family Language Policy; FLP）の研究においても、親の継承語教育への意識について研究が蓄積されている。例えば Curdt-Christiansen（2009）は、親の言語文化とアイデンティティの子への継承のためにカナダのケベック州の中国人移民の親の FLP がどのように計画・展開されているかを、親の言語イデオロギーから調査した。その結果、継承語は子に社会文化的なアイデンティティを形成させ、継承語は子に中国文化や価値観を伝える役割を果たすという親の言語イデオロギーが明らかになった。

2.3 教育者の継承語教育への意識

Okubo（2011）は、大阪府の小学校と地域コミュニティセンターで実施されている継承語教育実践の検証から、継承語教育や文化継承に熱心な教育者側と、日本生まれの外国にルーツを持つ児童やその親たちの間で、継承語教育実践の認識に相違があることを明らかにした。教育者は、日本に生まれ育った児童が外国人として扱われることに抵抗感を示しているにもかかわらず、児童がルーツを持つ国の言語での挨拶表現を児童にわざわざ確認するなど、児童の民族的背景を本質主義的に浮上させ、結果的にマジョリティとマイノリティの差異を強調していた。Okubo（2011）は、教育者のこのような本質主義的な認識に伴う教育実践は、マイノリティの人々のアイデンティティのエンパワメントを想定し民族名の使用を推奨するといった、かつての民族教育に依拠していると指摘した。さらに、高橋（2013）も、中国帰国児童内部の多様性に言及し、日本生まれの中国帰国児童の存在を挙げ、中国にルーツを持つという理由だけで彼らの中国語学習・習得を当然視することは児童を傷つけることになる」と述べた。

2.4 継承語不安（Heritage Language Anxiety, HLA）

言語学習における言語不安は、第二言語習得研究において研究が蓄積されてきた。しかし Sevinç & Backus（2019）は、従来の外国語や第二言語といった枠組みのなかでは継承語話者の言語的複雑性を捉えることができないとし、継承語学習に向けられるプレッシャーや不安・恐れなどといった言語不安を、継承語不安（Heritage Language Anxiety; HLA）と定義した（Sevinç & Dewaele, 2018）。HLA は言語的要因と社会的要因の2つに分けられる。前者は、継承語の能力不足、ネイティブスピー

カーとの能力の比較といった継承語使用・能力、継承語接触状況に関連する要因であり、後者は、プレッシャーのある状況、親の怒りや訂正による不安、継承語母語話者による否定的な評価・嘲笑や排除への恐れといった社会、心理、文化やアイデンティティに関連する要因に分けられる (Sevinç & Backus, 2019)。Sevinç & Backus (2019) はこの概念を用いて、オランダのトルコ系移民が継承語であるトルコ語に抱く HLA を明らかにした結果、オランダのトルコ系移民 2 世は、継承語母語話者である両親・祖父母やトルコ滞在時に接触したトルコ人からの期待や否定的な態度からプレッシャーを受けて、HLA を抱いたことを明らかにした。

このように、継承語能力への期待やプレッシャーとの関わりおよび HLA は、国内外の研究で、言語観を巡る研究や継承語教育実践における批判的考察などから周辺的に明らかになっているが、日本社会の文脈において、HLA に主眼を置いて、当事者である継承語を継承しなかったニューカマー 2 世の語りを考察したものは、まだ見られない。

以上から、本稿では、ニューカマー 2 世が継承語にどのような意識を抱いていたかを HLA から捉え、継承語を継承しなかった様相を彼ら自身の視点から明らかにすることを目的とする。

3. 研究協力者と研究方法

3.1 研究協力者

本稿では、外国出身の両親のもと日本に生まれ育ったニューカマー 2 世へのインタビュー調査のうち、親子間のコミュニケーションに継承語が使用されず日本語中心であったことから継承語を継承しなかったと判断した、ニューカマー 2 世の H さん（女性・20 代後半）のインタビュー調査データを考察する。

H さんは、1980 年代後半に専門職への就職を目的として来日した中国出身の両親のもと、1990 年代前半に日本で生まれ育った。生まれ育った地は、外国人が少ない地域であった。4 つ年下の弟を含めた 4 人家族である。家庭内では幼少期のほんの一時期だけ中国語が使用され、それ以降現在まで、子同士、親子同士で日本語が使用されている。親同士では中国語の場合もあり、親同士の中国語会話を耳にしていたこともあったが、中学校から高校まで父親が弟を連れて数年間中国へ転勤していたため、母親との二人暮らしも長く、家庭内で中国語を聞くことは多くなかった²⁾。H さんは、小学校 3 年生のときに、毎週土曜日の継承中国語クラスに 1 年間通った。その後中学校受験を経て、語学教育に熱心な中学校・高校に通った。高校 1 年生で 1 年間アメリカに語学留学をし、大学 4 年間もアメリカで過ごした。現在は日本で働いている。なお、H さんの継承語能力は、文脈がわかれば日常会話は理解できるが、ニュースなど専門的な話題は理解できない程度だという。

3.2 調査方法

インタビュー調査は、2022 年 3 月と 4 月に各 1 回の計 2 回、それぞれ 90 分実施した。実施形態は、初回はオンライン会議ツールで、2 回目は H さんの希望により対面インタビューで実施した。場所は、調査者である筆者の所属大学の空き教室で行われた。インタビューの実施に伴い、調査内容や目的、守秘義務の説明を行い、書面上にて承諾を得た。インタビュー調査の 1 回目は非構造化インタビューを実施し、生い立ち・居住経験・家庭環境・学校生活・言語環境など基本的な情報を軸に、幼少期か

ら現在までのライフストーリーを自由に語ってもらった。その回答を参考にしながら、2回目は半構造化インタビューで継承語および継承語教育環境への意識や考えを聞いた。後日、インタビュー調査の録音データを文字化した逐語録を送付し、内容を確認してもらった。なお、調査者である筆者自身も、中国出身の両親のもと日本で生まれ育ち、日本語を母語とする、継承語を継承しなかったニューカマー2世であることを伝えた。

3.3 分析方法

本研究では、テーマ分析 (Thematic Analysis) (Boyatzis, 1998) を用いた。テーマ分析を用いることで、語りのなかから継承語を継承しなかったニューカマー2世の継承語や継承語教育へ向ける潜在的意識をテーマとして導きだすことが可能だと考えた。

分析方法は土屋 (2016) に基づいて行った。まず、逐語録を熟読した後に、意味のまとまりをコーディングユニットとし、インタビューの逐語録をコーディングした。それと並行してコードの定義を記したコードブックを作成した。次に、類似したコードをまとめ、コードブックを発展させていった。その後、テーマおよびサブカテゴリーを生成した。

4. 結果と考察

以下、4.1 では、テーマ分析により生成された5つのテーマと付随するサブカテゴリーを示し、4.2 でテーマ②～④を中心に、対応するHさんの語りを示しながら、本稿の目的である継承語を継承しなかった様相の考察をしていく。なお、語りのなかでHさんは継承語を「中国語」と称したことから、語りに付随する部分においては継承語のことを「中国語」と記述していく。

4.1 テーマとサブカテゴリー

分析の結果、5つのテーマが生成された。それらは、テーマ①モノリンガル社会から向けられるまなざし (サブカテゴリー: 家庭内の言語環境の変化、認識させられる他者性)、テーマ②継承語能力への高い要求 (サブカテゴリー: 継承語を話すことへの抵抗と拒絶、優等生の出現による脅威)、テーマ③自己防衛のための継承語学習回避 (サブカテゴリー: 日本人になるためには不必要な中国語、中国人なら中国語ができるだろうと期待されることへの恐れ)、テーマ④自らの継承語能力への認識 (サブカテゴリー: 認識させられる高くない継承語能力)、テーマ⑤継承語の有用性への気づき (サブカテゴリー: 継承語能力への自信と悔い) であった。(図1 参照)

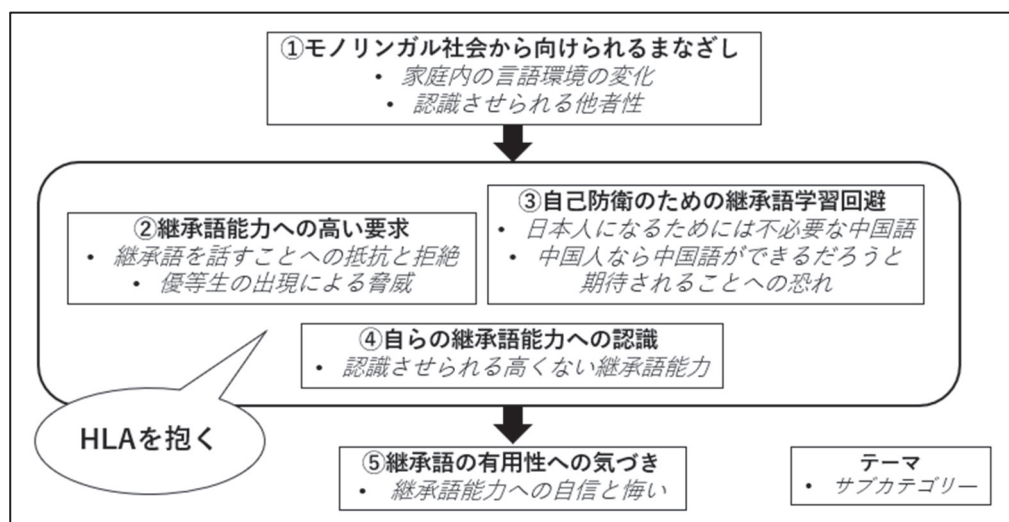
まず、テーマ①モノリンガル社会から向けられるまなざしに関する語りの概要は以下の通りである。当初Hさん一家が住んでいた場所は外国人が少なく、加えて、1990年代当時の日本社会は、今ほど多言語多文化意識は高くなかった。そのため周囲から、親子間の中国語使用に対し、違和感のある視線を向けられることが多かった。Hさんはそれに耐え切れず、自分の周囲からその原因となる中国語を排除すべく両親に中国語使用を止めるように言ったことから、親子間のコミュニケーションは日本語使用へと変わっていった。さらに、自分自身は日本で生まれ育ち周囲の同級生と同様だという認識があるにもかかわらず、中国の姓を有するだけで小学校の授業で「中国人代表」とされ意見を求められた。Hさんは、こうした周囲の同級生との差異の強調から、自らの他者性を認識させられるこ

ととなった。

その後、小学校から中学校にかけて得られた、テーマ②継承語能力への高い要求、テーマ③自己防衛のための継承語学習回避、テーマ④自らの継承語能力への認識において、HさんはHLAを抱いた。これについては、4.2にて詳述する。

そして、テーマ⑤継承語の有用性への気づきでは、Hさんは、高校1年生の1年間と大学4年間のアメリカへの留学をきっかけに、アメリカの多言語多文化環境に身を置く経験を得た。高校1年生の渡米当初、中国語が少しわかったことで英語で十分に意思疎通できない不安から救われたといった中国語の有用性を実感した。さらに、大学では中国人留学生コミュニティに参加できたことから、中国語能力に自信を得た。このようなポジティブな経験からHLAが緩和された一方で、自分の中国語能力の限界から中国人留学生たちとより深いコミュニケーションをとれなかった経験もあり、中国語を十分に身につけられなかったことに対する悔しい気持ちもあった。

図1 テーマ間の関連性と継承語への意識の変容（筆者作成）



4.2 継承語能力への高い要求

本節からは、テーマ②～④をHさんの語りを示しながら考察していく。まずテーマ②について、Hさんは、幼少期に親に中国語使用を止めてほしいと懇願して中国語接触を拒んでからは、日本語中心の生活を送っていた。しかし、親の意向から小学校3年生になるとHさんは毎週土曜日に継承中国語クラスに通っていた。また、Hさん一家は、中国への帰省はほぼなかったが、Hさんが小学生の頃は、電話やインターネットのビデオチャットを介して親戚との交流がたまに行われていた。その時は、Hさんの母親が中国語の挨拶や受け答えをHさんに伝え、それをHさんは画面または電話越しに復唱する、といった方法で交流していた。しかし、これはHさんにとっては恥ずかしく憂鬱な記憶であった。

発話データ1 サブカテゴリー：継承語を話すことへの抵抗と拒絶

「＜前略＞トーンを間違えたときとかに、「そうじゃない！」みたいに言われるのがすごい嫌だ、みたいな。8割でいいじゃんっていうのが、できないっていうのが。なんか、『8割ぐらいでき

てたら通じるじゃん』っていうのが、あの、許されない環境だったので、それがちょっと恥ずかしい。＜中略＞なんか一步間違えたらもう終わりですかみたいな。」

発話データ2 サブカテゴリー：継承語を話すことへの抵抗と拒絶

「中国語は確かに8割ぐらいしかできないかもしれないけど、日本語は100%できるわけじゃないですか。で、中国語しかできない親戚のために私は8割の中国語でちょっと頑張って喋ってみようってしてるのに、何でここまでされないといけないんだろうっていうふうに思った記憶とかはあるしく中略＞（中国語を話せるようになりたいという気持ちは）全然なかったですね。それだったら、自分が得意な日本語、みんな学んでくれって思っていました。」

発話データ1は、継承語母語話者教師による高度な継承語使用の要求をHさんが振り返った語りである。継承語母語話者である親や親戚にとって継承語は「親のことばであるから、子ができるのは当たり前」（中島, 2003）といった意識のもと、中国語を身につけてほしいという強い思いでHさんに厳格な態度を示したことは想像に難くない。これは、継承語中国語クラスでの継承語母語話者教師にとどまらず、電話越しまたは画面越しで交流する親戚たちにおいても見られたという。このような厳格な態度は、Hさんに継承語母語話者からの訂正への恐れや恥じらい、過度なプレッシャーによるHLAを与えることとなった。さらに、発話データ2に見られたように、中国語に向き合う自分の頑張りや日本語という言語レパートリーを親戚が評価しないという不満から、Hさんは最終的に中国語学習意欲を失い、中国語使用に抵抗を見せるようになった。

また、発話データ3は、継承中国語クラスで自分より中国語能力の高い児童の存在を知り、その比較対象の存在からHさんは緊張感を抱いたという語りである。Hさんは、その児童の中国語能力が自分の親を含めた児童の母親たちにとっての規範となり、自分にその規範が向けられるのではないかと危惧した。ここには、継承語母語話者（親）からの否定的な評価への恐れやプレッシャーといった、社会情動的要因のHLAがうかがえた。

発話データ3 サブカテゴリー：優等生の出現による脅威

「＜前略＞別に中国語できなくても、なんか『いいでしょ』とかって思ってたし、そのときも思ってるんですけど、でもなんか周りに比べる対象ができてしまったときに、『私はこの人たちよりもできないんだ』っていう。＜中略＞『この人たちが中国語ここまでできるから私もここまでできないといけない』って周りに思われちゃうとか、まあ（継承中国語クラスの児童の）お母さん（同士）の間だけですけど＜中略＞ムムムってなった記憶はあります。」

4.3 自己防衛のための継承語学習回避

次に、テーマ③を見ていく。Hさんは中学校受験に備えた通塾のために継承中国語クラスを止め、その後受験を経て、中学校に進学する。中国語への抵抗や拒絶から継承中国語クラスを止めてから、中国語とは無縁の生活を送っていたが、Hさんが入学した中学校には、第2外国語としての中国語クラスが存在した。しかし、Hさんは中国語クラスで中国語を学習することを望まなかった。なぜならHさんは、中国の姓を有する自分が、「中国語が話せてしまう」とさらに異質な存在となり周囲から

排除されて中学校生活で周囲と仲良く生活していけないのではないかという不安を抱いたことから、自分には中国語学習は不要だと認識していたのである。

発話データ 4 サブカテゴリー：日本人になるためには不必要な中国語

「中国語を喋れることによって、日本人じゃなくなる？ 日本人ではないんですけど元々。より中国人だと思われる機会って増えるんじゃないかって多分思ったんだと思うんですよね。なので中国語を話せることによって自分が友達からさらに違う人だと思われてしまうっていうのが怖くて、中国語ができない方が、みんなと近くいられるんじゃないかっていう。」

発話データ 4 は、中国語能力を有すると「より中国人だと思わ」れ、周囲の同級生が自分をさらに異質な存在とみなして、自分は排除されてしまうといった H さんの認識の語りである。その背景には、周囲の同級生が有し投げかけてくる「〇〇にルーツを持つなら、△△語を話せるはずだ」といった言語・民族・国家の結合意識があった。H さんは、この意識を内面化して「中国語を話せると中国人になり、周囲との差異から距離を置かれてしまう」といった仮定を自ら立てた。その結果、周囲の同級生から排除される恐れといった社会情緒的要因から生じた HLA を抱いた。

さらに、H さんの周囲には、高度な中国語能力を有する「ハーフ」の同級生もいた。

発話データ 5 サブカテゴリー：中国人なら中国語ができるだろうと期待される恐れ

「ハーフの中国人の女の子とかいて、その子とかがもう本当バッキバキにできたんですよ。なのでなんかその子は日本人とのハーフだったので、普通に日本人の名前なんですよ。＜中略＞(自分は)すごいバッキバキの中国人の名前で『中国人です』みたいな顔してるのに、『あ、この子中国語できないんだ』って、多分思われるのもちょっとなんか嫌だになって、なんかちょっとあほっぽくなって思ったので、ちょっとなるべく避けたいっていう感じが、強かったです。＜中略＞だって 50% 中国人のあの子、これぐらいできるのに、100% (中国人の自分)、もっとできるでしょ？みたいな。なんかそんな、そんな、違うよって思うんですけど。」

発話データ 5 では、「50%中国人」の同級生と、それに対し「100%中国人」である自分を比較した語りである。言語・民族・国家の結合意識のもとでは、中国的要素がより多い自分は周囲から中国語能力が当然視されているという認識をし、そのプレッシャーと、その期待に応えられない自分に HLA を抱いた。そこから、中国語能力が当然視されている自分が中国語初学者に混ざって学習することへの気後れと心理的負担を感じ、周囲からこれ以上誤解されることや無理解な視線を向けられることを回避すべく、中学校の第 2 外国語の中国語クラスには参加しなかった。

以上から H さんは、周囲の日本人同級生から自らの中国語能力が低いこと、「中国人なのに中国語が話せない」ことを認識されて、嘲笑されることへの不安と恐れといった、社会情緒的要因から生じた HLA を抱いた。

4.4 自らの継承語能力への認識

最後に、テーマ④を見ていく。H さんは、初対面で互いに名乗る場面で、H さんの中国の姓を聞いて

た多くの日本人から、Hさんが中国の姓を有することの説明を求められた。そこから彼らは、Hさんが「ハーフ」ではなく両親ともに中国出身であることを知って、Hさんの中国語能力を確認することがしばしばあった。

発話データ6 サブカテゴリー：認識させられる高くない継承語能力

『中国人なの?』みたいな。『これって中国の苗字だよね』みたいな感じで言われて。『そうだよ』みたいな。『私、なんかあの、親中国人だから』みたいな。で、なんか『ハーフなの?』みたいな。『あ、ううん。両方とも』みたいな。『え、じゃあ中国語できるの?』みたいな。＜中略＞ていうなんかそういうのとかがもうちょっと。毎回聞かれるので、毎回なんか『いや私は中国語そんなできなくて』みたいな。」

発話データ6からは、対話相手の日本人による「〇〇にルーツを持つなら、△△語を話せるだろう」といった言語・民族・国家の結合意識に基づいた問い、さらに、「ハーフ」ではなくて両親ともに中国人であるという背景から、より中国語能力を当然視する問いが投げかけられた。Hさん自身は、日本に生まれ育って、日本人と同様でいる認識があるにもかかわらず、自らの中国語能力不足を再認識させられ後ろめたい気持ちを抱き、同時に相手の日本人から否定的な評価をされる恐れから、社会情緒的および言語的要因のHLAを抱いた。

さらにHさんは、マジョリティである日本人や、継承語母語話者である中国人と会話するときも、中国の姓から中国語能力を有するとみなされ、自分の高度でない中国語能力を実感させられた。

発話データ7 サブカテゴリー：認識させられる高くない継承語能力

「(日本人に、中国の姓を有する理由を説明することで) 毎回『お前は外国人なんだぞ』ってリマインドされる過程で『お前中国語できないのかよ』みたいなのはすごいあるので。中国人の人と会話する時とかもうなんか中国語で話しかけられて、『ああごめんなさい。私無理』って返すと(相手から)『勿体ない!』みたいな。」

発話データ7からは、Hさんは、日本人と会話するなかで自分が中国の姓を有することから中国語能力を確認され、それによって、中国の姓を有するという自らの他者性と高くない中国語能力を再認識させられた。さらに中国人との会話においては、自らの高くない中国語能力を実感させられた。ここからは、自らの中国語能力不足といった言語的要因から生じたHLAと、中国語能力が低いことに対するHさんの後ろめたい気持ちがうかがえた。このように、対話相手の日本人、中国人の双方から、Hさんに対し、言語・民族・国家の結合意識に基づいた問いや態度が向けられたことが明らかになった。

4.5 考察のまとめ

以上、テーマ②～④を中心に、対応するHさんの語りを示しながら、本稿の目的である継承語を継承しなかった様相を考察した。Hさんは、周囲の人や親・親戚などの問いや態度からHLAを抱き(「テーマ②④」)、継承語学習や継承語使用に対し、抵抗や拒絶、回避した(「テーマ③」)ことが明ら

かになった。そして H さんが HLA を抱いた背後には、言語・民族・国家の結合意識に基づいた、日本人同級生など周囲の「親が〇〇人なら、子は△△語を話せるだろう」という期待や、親・親戚の「親が〇〇人なら、子は△△語を話すのは当然だ」という継承語の継承への強い意思が見られた。

言語・民族・国家の結合意識について、田中（2016, p.12）は、ニューカマー 2 世以降の人々が日本社会で母語として日本語を身につけることから、『日本語』を『母語』として身に着けてはいるが『日本人』ではない人々の存在の増加に言及し、こうした状況は「『日本語』は『日本人』のものである」といった、ある言語をある特定の国籍や血統を持つ人々のものとみなす考え方への再考を今まで以上に強く迫ってくる」と、言語と民族、国民国家に基づいた本質主義的な言語観を再び捉え直すことは喫緊であるとした。それに関連して、安田（2011, p. 101）は、『日本語』により習熟していくことで、『祖国』を感じ、『日本人らしさ』を体得していくという論理」を批判し、「ことばは誰のものか」という問いを立てた。そこから、日本において、ことばと民族・国家などとの強い結びつきが当然視されていたと指摘し、ことばを個人のものとして考えるという視点を持つことを提案した（pp. 102-103）。しかし、このように日本社会では、日本語に対する言語・民族・国家の結合意識からの脱却に向けた議論がなされている一方で、日本社会において、継承語といった「日本語でない言語」と外国につながりを持つ「日本人でない人々」に対して向けられる言語・民族・国家の結合意識に関する議論は、まだ見られない。そうしたことから、この「ある言語をある特定の国籍や血統を持つ人々のものとみなす考え方」（田中, 2016, p. 12）という、いわば、言語・民族・国家の結合意識を有する従来の日本社会における言語観は、「日本語でないことば」と「日本人でない人々」に向けて維持され続け、「親が〇〇国出身＝〇〇人＝（生まれや育ちの経緯にかかわらず）子も〇〇人＝△△語話者」といった本質主義的な等式を導いてはいないだろうか。そして、それが「継承語イデオロギー」として成立し、疑われることなく外国にルーツを持つ子へ向けられているのではなかろうか。

このような、「言語・民族・国家の結合意識に基づいた継承語能力への過度な期待・プレッシャー」を「継承語イデオロギー」とすると、H さんが継承語を継承しなかった様相には、「継承語イデオロギー」の存在が大きく影響したと考えられよう。H さんは、当事者の関係者でない、居住国のマジョリティという立場の日本人同級生だけでなく、当事者の関係者、継承語母語話者である親・親戚などからも「継承語イデオロギー」を向けられて HLA を抱き、そこから継承語学習や継承語使用に抵抗を覚えて、拒絶し回避したことから、継承語を継承しなかった。それだけにとどまらず、H さん自身も「継承語イデオロギー」を違和感なく内面化して、それに基づいた自らの仮定によって HLA を抱いた過程から、「継承語イデオロギー」は日本社会において広く共有されている可能性も考えられる。

5. おわりに

本稿は、継承語を継承しなかったニューカマー 2 世の継承語への意識を、HLA から捉え、継承語を継承しなかった様相をニューカマー 2 世の視点から明らかにすることを目的とした。その結果、ニューカマー 2 世の H さんは、周囲の日本人や親・親戚の問いや態度から HLA を抱き、継承語学習や継承語使用に抵抗し拒絶、そして回避していた。加えて、そのような相手の問いや態度の背後には、「言語・民族・国家の結合意識に基づいた継承語能力への過度な期待・プレッシャー」である「継承語イデオロギー」が存在することが明らかになった。この HLA と「継承語イデオロギー」の結びつ

きからは、「継承語イデオロギー」が、ニューカマー2世が継承語を継承しなかった要因のうちの一つである可能性が示唆された。そして、この「継承語イデオロギー」は、「ある言語をある特定の国籍や血統を持つ人々のものとみなす考え方」（田中, 2016, p. 12）という、言語・民族・国家の結合意識に基づいた従来の日本社会における言語観が、日本社会における「日本語でない言語」と「日本人でない人々」に向けてそのまま維持された結果生じたのではないかと考察した。

本稿の分析には含められなかったが、その後 H さんはテーマ⑤の通り、アメリカ留学経験から継承語の有用性に気づき、その結果、HLA を乗り越えることができたことをここで言及しておきたい。留学中、H さんは、部分的に中国語能力を有したため中国人留学生のコミュニティにも参加でき、自分の活動圏や視野を広げ、中国語能力に自信を得た。しかし、自分の中国語能力では中国人留学生とさらに仲を深めることができなかつたもどかしさから、自分の幼少期時代に中国語を教えなかつた親や中国語を勉強しなかつたその当時の自分を責める気持ちを抱いたという。それは、H さん自身が英語を苦勞して習得した経験によって、言語習得の大変さを理解しているからこそ生じた思いであろう。

なお、調査対象者の H さんの場合は、外国人が少ない地域で生まれ育つたことや、H さんの弟のように一定期間親の母国で暮らす経験がなかつたことなどが、H さんの継承語使用に影響を与えた可能性があることは言うまでもない。今後はより多様なニューカマー2世を対象に継承語を継承しなかつた様相を探索する必要がある。

そして、今後の課題として、「継承語を継承しなかつた」という定義について、さらに検討していきたい。例えば、子が継承語能力を有するものの親子間のコミュニケーションが日本語である場合など、家庭における言語的多様性をより詳細に想定する必要がある。そして、「親が〇〇人なら、子は△△語を話すのは当然だ」という「継承語イデオロギー」は、子だけに向けられるものではない。「子に継承語を継承させなければならない」と、継承語を継承させる親にプレッシャーとして作用する場合も十分にあると考えられる。この点も、今後の研究で考察をしていきたい。

謝辞

本研究に協力してくださった H さんに心から感謝申し上げます。また、貴重なコメントをくださった2名の匿名の査読者の皆様に厚く御礼申し上げます。

注

- 1) 日本人ろう者にとって母語は、独自の文法体系を持つ日本手話であるが、ろう者の子に生まれても自身はろう者ではないコーダは、音声日本語を母語とし、親と母語が異なる。また中島（2019）は、コーダは手話と日本語のバイリンガルのイメージを持たれるが、全てのコーダが手話能力を有するとは限らないと指摘する。さらに、コーダの手話継承には、移民の継承語教育の課題とは異なる問題もある（安東, 2022）。
- 2) H さんの父親は中国方言を母語とし、母親は中国で共通語である普通話を母語としていた。親同士での会話は普通話で行われていた。

引用文献

- 安東明珠花 (2022) 「コーダの手話継承—コーダ同士の語りからの分析・考察—」『言語文化教育研究』20, 59-73.
<https://doi.org/10.14960/gbkkg.20.59>
- 尾関史・深澤伸子・牛窪隆太 (2011) 「日本国外で成長する子どもたちにとっての日本語使用経験の意味」『リテラシーズ』9, 11-20.
- 坂本光代・宮崎幸江 (2016) 「日本に住む多文化家庭のバイリンガリズム」宮崎幸江編『日本に住む多文化の子ど

- もと教育—ことばと文化のはざまで生きる—(増補版)』(pp.17-46) 上智大学出版
- 志水宏吉・清水睦美編(2001)『ニューカマーと教育—学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって—』明石書店
- 高橋朋子(2013)「中国帰国児童の主体的な関係性の構築を目指して」『異文化間教育』37, 15-31.
- 高橋朋子(2019)「中国にルーツを持つ子どもの母語・継承語教育」近藤ブラウン妃美・坂本光代・西川朋美編『親と子をつなぐ継承語教育—日本・外国にルーツを持つ子ども—』(pp. 253-267) くろしお出版
- 田中里奈(2016)『言語教育における言語・国籍・血統—在韓「在日コリアン」日本語教師のライフストーリー研究—』明石書店
- 土屋雅子(2016)『テーマティック・アナリシス法—インタビューデータ分析のためのコーディングの基礎—』ナカニシヤ出版
- 坪田光平(2018)「中国系ニューカマー二世世代の親子関係とキャリア意識—トランスナショナルな社会空間に注目して—」『国際教育評論』14, 1-18.
- 中家晶瑛(2022)「親子間使用言語を日本語とするニューカマーの親子から見えることばの実践への意味付けと親子関係—ことば観との関わりに着目して—」『ジャーナル「移動する子どもたち」—ことばの教育を創発する』13, 126-161.
- 中島和子(2017)「継承語ベースのマルチリテラシー教育—米国・カナダ・EU のこれまでの歩みと日本の現状」『母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究』13, 1-32.
- 中島和子(2003)「JHLの枠組みと課題—JSL/JFL とどう違うか—」『母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究』ブレ創刊号, 1-15.
- 中島武史(2019)「コードダイメージと言語意識—移民の子どもとの類似・相違—」『社会言語学』19, 85-99.
- 本間祥子・重松香奈(2021)「海外長期滞在家庭の子どもは補習授業校での学習経験をどのように意味づけているか」『母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究』17, 92-108.
- 真嶋潤子編(2019)『母語をなくさない日本語教育は可能か—定住二世児の二言語能力—』大阪大学出版会
- 安田敏朗(2011)『「多言語社会」という幻想』三元社
- 山下里香(2018)「移動するパキスタン人ムスリム女性の青年期の言語生活」川上郁雄・三宅和子・岩崎典子編『移動とことば』(pp.214-244) くろしお出版
- Boyatzis, R. E. (1998). *Transforming qualitative information: Thematic analysis and code development*. SAGE Publications.
- Curdts-Christiansen, X. L. (2009). Invisible and visible language planning: Ideological factors in the family language policy of Chinese immigrant families in Quebec. *Language Policy*, 8(4), 351-375.
<https://doi.org/10.1007/s10993-009-9146-7>
- Nakamura, J. (2016). Hidden bilingualism: Ideological influences on the language practices of multilingual migrant mothers in Japan. *International Multilingual Research Journal*, 10(4), 308-323.
<https://doi.org/10.1080/19313152.2016.1206800>
- Okubo, Y. (2010). Heritage: Owned or assigned? : The cultural politics of teaching heritage language in Osaka, Japan. *Critical Asian Studies*, 42(1), 111-138. <https://doi.org/10.1080/14672710903537530>
- Sevinç, Y., & Backus, A. (2019). Anxiety, language use and linguistic competence in an immigrant context: A vicious circle? *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 22(6), 706-724.
<https://doi.org/10.1080/13670050.2017.1306021>
- Sevinç, Y., & Dewaele, J.-M. (2018). Heritage language anxiety and majority language anxiety among Turkish immigrants in the Netherlands. *International Journal of Bilingualism*, 22(2), 159-179.
<https://doi.org/10.1177/1367006916661635>
- Skutnabb-Kangas, T. (1981). *Bilingualism or not: The education of minorities* (Multilingual Matters 7). Multilingual Matters.

要 旨

本稿は、日本社会で親から継承語を継承しなかったニューカマー2世の語りから、その様相を HLA (継承語不安) の観点のもと、ニューカマー2世の視点から明らかにした。その結果、調査対象者は、周囲の日本人、継承語母語話者である親・親戚などの問いや態度から HLA を抱き、継承語学習や継承語使用を抵抗・拒絶・回避していたことがわかった。また、その相手の問いや態度には「言語・民族・国家の結合意識に基づいた継承語能力への過度な期待・プレッシャー」である「継承語イデオロギー」が見られ、この存在から、調査対象者は HLA を抱き、それにより継承語を継承しなかった可能性が示唆された。そしてこの「継承語イデオロギー」は、田中里奈氏の言うところの「ある言語をある特定の国籍や血統を持つ人々のものとみなす考え方」という従来の日本社会における言語観がそのまま「日本語でない言語」と「日本人でない人々」に向けられ維持された結果、生じたのではないかと考察した。

Abstract

This paper explores particular cases in which one did not inherit her heritage language from the perspective of HLA by looking at narratives of second generation newcomers who did not take over their parents' language in Japanese society. The research shows that, rather than they simply did not take it over, they even resisted, rejected, or avoided learning and using their heritage language, because of the attitudes of people surrounding them including their parents, relatives, and other people. Furthermore, it is noticeable in their questions and attitudes that they embrace a heritage language ideology, that is, excessive expectations and pressure on the ability to use an inherited language based on a sense of linguistic, ethnic, and national cohesion, which, I assume, eventually caused them to have HLA, and therefore difficulties inheriting heritage language. I conclude that heritage language ideology ensues as a result of the traditional view on language in Japanese society, in other words, the idea that a certain language belongs to people with the decent or nationality where it is spoken, according to Rina Tanaka, being uncritically applied to non-Japanese people and language and maintained as such.